

心の病気

高三

言葉はとても便利な反面、扱いによっては人を傷つけることになる。一言が受け手にとって善となるか悪となるか、発言者には決められない。人は誰しもコンプレックスや悩みをもっていると思う。だが、そんなことを考えながら人と関わっている人なんて、そうはいないだろう。もし全ての人がある考えに至っていれば、極端な話、差別もいじめもなくなる。見た目であったり、人種であったり、人の「差別の理由」はたくさんある。だが、これらは「差別の理由」であって、「差別をしてもよい理由」ではない。

差別やいじめをする人、彼らもまた、自身にコンプレックスがあるのかもしれない。だからといって、その行為が許される訳ではない。焦りや劣等感、そういったものが人を腐らせ、弱らせ、心を黒くするのだろう。そして、感情が行動へと変化する。

一つのいじめが、時間や離別、人の手以外で終

わったとき、それは本当の終わりではないと思っている。いじめをしていた者は、次の相手を探すだろう。されていた者は、過去を抱えて、怯えて、最悪の場合立ち直れないか、怯えを怒りに変えて自身が加害者になるかもしれない。

いじめも差別も、心の病気なのだ。人を変えてしまう。人から人へ移ってしまうこともある。もつと悪いのは、人が死んでしまうことだ。

しかし、この病も、決して不治というわけではないと僕は思っている。人が人を気遣い、おもんぱかり、その心の内を思っであげること、人が死んでしまうような最悪のケースを防ぐことができる、僕は希望を持っている。